＝基調講演＝

「生きて愛して　目で開いた　もう一つの広島」

講師：仲川　文江氏（NPO法人広島県手話通訳問題研究会理事）

一日目　12月４日　夜

司会からの紹介

午後の講演をご覧になった後、夕食を食べておなかいっぱいでしょうが、素晴らしい講演が始まりますから、決して眠らないでくださいね。寝ないように見張っていますから。

仲川さんはろう者のご両親からお生まれになりました。今までいろいろな活動をしてこられましたが、主に三つご紹介します。著書「生きて愛して」に書かれているように、被爆ろう者の取材をして、被爆体験をまとめられています。また、昨年やっと建立されました、「原爆死没ろう者を偲ぶ碑」のための運動にご尽力されました。そして、医療ネットワークも中心になって作られました。他にもさまざまな活動をしておられますが、その紹介は割愛して、講演に入ります。よろしくお願いいたします。

仲川　文江氏

講　演

こんばんは。ご紹介いただきました仲川と申します。今、司会の方はああ言われましたが、夕食を食べて眠い人はどうぞお休みください。おこったりしませんから、寝てくださいね。興味のある方だけご覧下さい。

皆さんご存知のように、私の両親はろう者で、私は生まれたのは三次なんですが、昭和２３年に広島に引っ越してきました。私は小学三年生でした。それからずっと広島にいて、広島のろう者の皆さんと親しくおつきあいしながら育てていただきました。

私の手話は古くさいと皆さんによく言われるのですが、新しい手話はどうもおぼえられなくて、古いままになっていますがご辛抱ください。自分のやりやすい手話で話しますので、もしわからなかったら、想像でカバーしてください。それでは話を始めます。

（板書「廣島」「ヒロシマ」「ひろしま」）

三つともここ、広島のことですね。この「廣島」は今は鳥居の形の手話ですが、昔はこのように頬に親指と人差し指でつくった丸をつけたような、こんな手話でした。この手話の由来は、ここに日本軍の第五師団があり、岡山生まれの木口小平というラッパ兵がいました。昔の戦争のやり方というのは、敵に向かって攻める時は必ず進軍ラッパを吹いたのです。今は戦闘機で爆撃しますけど、明治時代の戦争は、ラッパの音をきいてから敵に向かって、銃や剣を抜いて、走って攻めて行きました。満州（今のロシア）で戦ったとき、この木口小平が進軍ラッパを吹いて、兵隊たちが攻めて行ったのですが、敵の銃弾が木口に命中したのです。しかしラッパの音が途切れたら、兵隊たちの士気が下がってしまうので、木口はずっとラッパを吹き続けた。「木口小平、死んでもラッパを離さず」という有名な話が教科書に載りました。ここ広島から第五師団が出発した、ということで、ラッパを吹くときの頬の膨らませ方から、この手話が広島のことを表わすものとして最初に生まれました。その後、「ヒロシマ」この手話は原爆が投下された時のきのこ雲で表されたこともありますが、今は鳥居の形です。

原爆は長崎もきのこ雲でなく、原爆の爆風が平野に広がるような形の手話でした。原爆の後、平和の町「ヒロシマ」になりました。「ひろしま」は国際観光都市としての名前ですね。

このように、同じ広島でも書き方、手話の変化を見ただけで、広島の歴史がわかります。

「ヒロシマ」については、午後Aコースで資料館をまわられた方たちは説明を受けたと思います。説明が重なりますけど少しお話したいと思います。

まず、広島は「軍都」として知られていたことはご存知ですね。第二次大戦からではなくて、この町が生まれたときから、広島は「軍都」の役割を担っていました。

昔、広島は浅野家が治めていました。浅野家の家紋の形からこのような手話（親指と人差し指を平行にした両手を重ねる形）で表します。山口にいた毛利家が、徳川家との戦いに敗れた、江戸時代の歴史はご存知ですか。徳川家は、山口の毛利家を攻めるため、この広島に各地から軍勢を集めました。浅野家の当主は、徳川勢と毛利勢の間に立って仲介役をつとめようとしたわけですが、それが広島が軍都と呼ばれるようになる元でした。

浅野家は一度ならず二度も、徳川勢と毛利勢の仲介役に立ち、いくさを収めたということです。この時が、広島がそれ以降、軍都となっていく始まりだったと言われます。

明治時代に入りますと、日清・日露戦争が起こりました。この時点で広島は軍にとって便利な所にありました。というのは、東京から広島までの鉄道がすでに敷かれていたのです。山陽線で東京から広島までつながっていて、輸送しやすかったのです。

浅野家の時代に、瀬戸内海にはたくさんの小島が浮かんでいるが、ここは一番大きな島、広い島だから「広島城」と名づけたという由来があります。「広い島の城」という意味です。山に挟まれ、海に面して、三角州になっています、地図で見るとわかります。海にはたくさん島があるが、ここは一番広い島だからと、ここに城を築いた時、毛利の殿様が「広島城」と名づけました。初めは平野の部分は狭かったのですが、山からたくさんの土をおろしてきて埋め立て、土地を広げました。この山に挟まれた三角の地形をデルタといいますが、山から７本の川が流れていて、海につながっています。このデルタの地形が、原爆を投下したら効果があるだろうと考えられました。

毛利勢と徳川勢が関が原の合戦で闘い、毛利勢が敗れ、山口に移った時、広島城が作られたので、もう４世紀、410年ぐらいの歴史があるのですね。その後、デルタ地帯を横切るように鉄道が敷かれました。瀬戸内海にはたくさんの島がありました。広島は軍にとっては地理的な条件もよかったのです。鉄道で輸送してきた物資をすぐに港から船で出すことができたのです。　そういうわけで、日本中から軍需物資が広島に集められました。広島の港があるところは、宇品といいますが、手話では「港」と表します。日本中から集められた軍需物資を宇品港まで運ぶために、広島駅から宇品港まで、鉄道が建設されました。たった16日間でできたそうです。　鉄道の駅から港まで物資は運搬されて、船で各地の軍隊に運ばれました。ですから、広島には軍都になる条件が備わっていたということです。浅野の時代から始まって、日清日露戦争の時の地理的な要因なども加わって、広島は次第に軍都としての色を濃くしていきました。

「大本営」というと年配の方はおわかりでしょうが、天皇陛下が軍にお越しになって指令を出されるところ、という意味です。その大本営が広島に設営されました。ですから、日清日露戦争のとき、軍の最高司令官の天皇が広島城に行幸されて、軍に指令を出したのです。この広島にいて、軍を召集し、戦術会議を開き、戦略を練ったのです。そのために広島にはあらゆる軍事施設が整備されました。浅野家の時代から、さきほども話しましたように広島は山と海が川でつながっていて、交通の便もよく栄えておりました。広島は昔から学校教育にもかなりのお金をかけ、教育レベルが高いと昔から言われています。山と海が近いという地の利もあって水運による交易も盛んで、財政が豊かだったところから、浅野家の時代より寺子屋でも学問のみならず、剣術などの武術が教えられていたのです。資金が潤沢だったことにより軍都として発展し、大本営が置かれて軍事施設もでき、軍需工業も次第に発展していったのです。全国の軍隊が集められ、ここ

から出兵するために軍人が召集されたので、人口も急増しました。大きな宿泊施設ができ、文化的にもレベルが高く、軍事的にもどこからも攻撃されないように、防衛策が練られ、守りは完璧と言われました。

ここで、軍都としての広島の役割が大変重くなったのです。特に宇品港には通信部が置かれ、戦争においては今でも一番重要とされる、情報の基地になりました。通信部は出港した軍隊への指示や、今の戦況を知らせる情報の伝達など、あらゆる連絡がここから無線で各地に伝えられ、最重要部隊になりました。あかつき部隊と呼ばれ、いわば日本軍の心臓部でした。今でも戦時にはそうですが、通信が最も重要とされます。今ならインターネットですね。この部隊が宇品に置かれて、日清戦争の時代から、第二次大戦まで、すべての戦争の心臓部がここ広島にあったのです。

第二次大戦では、日本の各地が敵国からの空襲の被害を受けました。ところが広島にはまったく空襲はありませんでした。敵機が通ることはあっても、爆撃されなかったのです。他のところは次々と空襲のために、壊滅的な被害を受けたのに、広島だけは無事でした。広島は防衛策が完璧で攻撃を受けないようなバリアがはりめぐらされていたので、敵機の爆撃を受けることはなかったのです。しかしそれが、アメリカが原爆を落とそうと計画した一番の要因でした。なぜなら、他の都市は空襲で焼け野原になっていたので、新型爆弾を落としても意味がないと考えられたからです。無傷の広島に、原爆を落としてどれぐらいの影響を及ぼすか見てみたい、というのがアメリカの考えでした。東京は４月に大空襲があって、焼け野原になっていました。大阪も他の都市も空襲を受けていましたから、まだ破壊されていないところに新型爆弾を落として影響力を見てみたい、とアメリカは考えたわけです。原爆投下の候補地としては広島、小倉、長崎が挙げられていました。条件として、まず空襲の被害がいまだ無いところ、そして朝日が強く当たるところがいいとされていました。雨では威力が発揮されないのです。広島の地形は、町の中心に原爆を落としたら、山にはねかえって爆風がまた中心に戻る、つまり破壊力が倍になると考えられました。

この新型爆弾は、アメリカの手話でどうやるのかはわかりませんが、最初に研究されたのはドイツです。アインシュタインという科学者が、ドイツのナチスの政策に嫌気がさしてアメリカに亡命したのです。アメリカは、彼が新型爆弾の研究をしているのを知っていましたので、早速呼び寄せました。そして新型爆弾が開発されたのです。原爆が作られ実験された後、アメリカはどこかに落としてみたいと猛烈に望み、その時敵国だった日本が標的になりました。「原爆投下は、戦争を早く終結させたかったため」というのはアメリカの口実で、本当は新型爆弾の実験をしたかったのです。日本のいくつかの候補地の中でも、広島が最適とされたのは、一つ目の条件は地理的に行きやすい、二つ目は朝日が強烈に当たる。８月でしたから、特に朝日が強かったのです。もし８月６日の朝、雨が降ったらその日は原爆投下されなかったでしょう。三つ目は地形的な条件で、真ん中に落としたら衝撃波が山に当たってまた中心地に戻る、と条件がそろっていたことから広島に原爆が投下されました。小倉は、その日は雨雲が出ていたので投下されませんでした。

次に長崎に投下されました。長崎も広島同様、山にはさまれて海に面しています。地形は広島に似ています。朝日の強さは広島の方が強かったのです。長崎は午前11時で、ここは朝８時だったでしょう。人口も広島の方が多く、被爆したときの人口は20万から30万といわれますが、長崎は８万から10万です。地形的には長崎のほうが入り江のようになっていて面積は広く、影響が強そうに思われます。爆弾は広島より長崎の方が大型だったけど、効果的には広島が強かったということです。広島は山に挟まれて面積は狭かったのですが、山に当たった爆風がはねかえってきたこともあり、広島の被害の方が大きかったのです。そのような条件を考えて８月６日に広島に原爆が落とされました。最初は「新型爆弾」と言われ、８月14日ごろと思いますが「原子爆弾」

という名称がつけられました。

８月６日当日、広島市内にいた人は約20万人といわれます。その中には当然、聞こえない人たちもいました。私は以前、被爆ろう者の取材をしたのですが、ほとんどがもう結婚している、成人のろう者でした。これは私が初めからやろうと思ったのではなく、全通研の伊東委員長から頼まれたのです。日本各地の、戦争体験者のろう者から聞き書きをして本を作りたい。特に広島は被爆地だから、被爆したろう者の話を取材してぜひまとめてもらいたい、と伊東先生から依頼された時はびっくりしました。普通にただ読み取るのではなく、文章にしろと言われたのですから。私はろう者の手話を見ることには慣れていても、それを日本語の文章に直すことなどできません。手話と日本語は違うものだから、ろう者の手話を日本語に翻訳することなどできるわけがないと思いました。話し言葉に直すのならまだしも、文章にするとなるといろいろ補わなければなりません。

たとえば、「８月６日の朝、どうしていたの？」ときいた時、ろう者が「朝、ごはん食べた、新聞見た」と手話で話されたのです。手話単語にするとたった３語です。これをどういう文にしたらいいのでしょう。普通の読み取りならこれでいいのですが、実際文章にするとなるとこれでは足りません。まず、「８月６日の朝、８時15分にご飯を食べた」どうして仕事に行ってないのでしょう。また、８月６日といっても当然「昭和20年」ですから、その当時の朝ごはんがどんなものだったかも気になります。食べたのも一人なのか、家族全員なのか、何人なのかもきかなくてはいけません。戦時中の家というと、灯火管制で外に明かりがもれないように、紙を切ったのをガラスに何重か斜めに貼っていたものです。

「８月６日の朝、雨だった？」ときくと「いや、暑かった」と答えます。「そのとき、どこにいたの？」ときくと、「夜明けまで仕事をしていて、朝帰ってきた」と言うのです。「昭和20年に、ろうあ者にどんな仕事があるの？」ときくと、「軍需工場で木の四角いものをつくっていた」「その四角いものは何？」「兵隊さんの銃を入れる箱」　その人が言うには、軍需工場は朝から夜中までフル稼働していて、２交代で朝帰ってきたのですね。

「朝帰ってきて、８時15分にはご飯食べてたのね、中身は何？」ときくとお箸を横にふり動かすような動作で答えられました。「それは何？」とくわしくきいていくと、ほんの少しのお米と大根の漬物を刻んだものをまぜたご飯なんですね。そんなふうに、一つ一つきいていくと、短い文でもとても長いものになってしまいます。

「新聞見た」についてもききました。「毎日配達されたの？」「うん、毎日配達された」戦時中で男たちはみな戦地に出征したのに、いったい誰が配ったのだろう、と思いました。今の手話と違って、「新聞」の昔の手話は新聞配達員が小脇に抱えて、配っている動作でした。一軒一軒歩いて配ったのです。「若い男性はみな戦地に行ってたでしょう、誰が配ったの？」「足の悪いおじさんだったね」「毎朝配達に来たの？」「うん、毎朝配ってたよ」「で、新聞は読んでわかったの？」「わからんよ」「え、わからなかったの？」「見出しの漢字ぐらいはわかったけど、細かい記事はわからん」　新聞を読む、というよりわかる見出しの字を拾っていたんですね。「それで、新聞をこう広げて・・・」と今の新聞の大きさに手を広げると、「違うよ、これぐらい」と小さく手を広げました。戦時中は紙も不足して、今よりもずっと小さいサイズの新聞紙だったのです。物資不足で紙も質が悪く、一枚だけの新聞、一面だけ印刷されていた、小さい新聞を読んでいた。だいたい見てわかりました。

家の間取りや、方角、広さもききました。「六畳の部屋が一間と、台所のある土間だけ」「誰がごはんをつくったの？」「お母さん」「兄弟は？」「いない。お母さんと二人だけ」お母さんが朝ごはんを作ってくれて、それがほんの少しのお米と大根だったんですね。「おかずは？」「ないよ。漬物だけ」「それじゃおなかいっぱいにならないでしょう」「何杯もおかわりして、やっとお腹が

ふくらんだ」というように詳しく聞いた後、今度はこれを文章にして書かないといけません。手話での会話なら「朝」「ご飯」「食べた」「新聞見た」で、ああそうなの、と済むのですが、文章がこれだけでは、読んだ人はさっぱりイメージがわきません。その人の当時の暮らしを思い浮かべながら、その人の仕事や家の中や家族、食べ物などひとつひとつたずねて、当時の世相も考えながら文章にして、やっと読んでわかる文になるのです。

取材のとき、質問に答えてもらうだけでも大変でした。時間がどんどん長くなると、相手も飽きて余計なおしゃべりが始まってしまいます。ろう者はそういうところがありますね、質問していることでなく、自分の好きな話を始めてしまって、どんどん横道にそれてしまう。でもこちらは辛抱強くひたすらきいて、その話が終わったと思ったらすぐ本筋に戻してさっきの質問の続きをする。ですからとにかく時間がかかりました。今はろう者の方たちも話し慣れていて、こちらはそれを見ながら「ちょっと待ってね」と断ってメモできるのでしょうが昔はそうはいきませんでした。

最初に取材したのはもう、27、8年も前のことですから、ろう者も自分自身のことを語る力はまだあまりありませんでした。だから「朝、ご飯食べた、新聞見た」ぐらいの話になる。それをこちらが当時の状況を思い浮かべながら、自分の想像していたものと合うかどうか確認するために一つ一つ質問する。その積み重ねですから時間がかかったわけです。伊東先生がおっしゃったような簡単なものではありませんでした。

初め、私には荷が重過ぎる、そんな能力は無いから、勘弁してくださいと申し上げたのですが、何度もお願いされて、お手紙をいただいたものですから、もう本当に困り果てました。それでやむなく引き受けたのですが、やろうと思ったのには他にも理由があります。やろうかどうしようか悩んでいた時、日本ではろう者の歴史について書かれた本は皆無だということを知りました。これは私には驚きでした。歴史の本の中にも、ろう者についての記述はまったくなかったのです。これには疑問を覚えました。アメリカなど海外の歴史の本には、ろう者について書かれているものもあるのに、日本には全く無いのはおかしいと思いました。

盲人については、江戸時代に検校（けんぎょう）という役職がありました。これは、盲人のあんま師の最高位で、徳川の時代に殿様のあんまをした、という役職で、晴眼者が手を引いて案内をした、ということが歴史書に書いてあります。たとえば映画の世界にも、目の見えない「座頭市」が出てきますね。ろう者は映画の歴史にさえもいません。これはおかしい、盲人の歴史はあっても、ろう者の歴史が全くないのはおかしいと思いました。伊東先生には、「被爆したろう者の体験をぜひきいて欲しい」と依頼されたのですが、私はむしろ「そのろう者の人生を知りたい、ききたい」と思いました。ろう者の歴史がわかれば、その本を出した後も、これからのろう者の未来もわかるのではないか、と思ったのです。それで「やっぱりやろう」と心を決めました。

初めて取材でお会いしたのは掛谷（かけや）さんという方です。91歳で亡くなられたので、今もしご存命でしたら百歳を超えています。背が低く、細身で腕も細かったので、このように手首をつまむような動作で掛合さんのことを表していました。掛谷さんは家も宇品で私の家に近く、被爆されたことは知っていました。掛谷さんにいろいろお話をうかがって、さてその次の人、と言っても私には心当たりはありませんでした。さがすのも大変ですし、ろう者にきいてまわるわけにもいきません。父に頼もうとも思いませんでした。伊東先生は「お一人に」と言われたので、掛谷さん一人でいいと思ったのです。その掛谷さんのお話をきいてまとめるだけでも１年かかりました。原稿を清書して出したあと、やれやれ、これで終わり、と思ったら、この原稿が全通研の本に載ったのです。そのあと、全国から大きな反響がありました。またぜひ、二人目、三人目のろう者のお話もお願いしたい、と言われたのですが、先ほどもお話しましたように、一人のお話をうかがうだけでも大変なのです。えー、またやるの、と思いましたが、頼まれてしまった以

上、気が小さいものですから断る度胸もありません。

しかし二人目、三人目と取材しようにも、誰にきけばいいかもわかりません。その時、父の三上が「被爆体験のあるろう者なら心当たりがある」と言いました。「でもお会いしたこともない人だから」「なら、先に会って、取材に応じてくれるかきいてみようか」と、父がまずそのろう者に交渉に行ってくれました。よかったと思い、待っていたら父に「来てもいいそうだ。行って来い」と言われ、家にうかがってみると、その女性は、「三上さんの娘さんね。まあ、しょうがない、お入りなさい」としぶしぶ入れてくれました。

最初はあまり話してくれなかったのですが、二度三度と会ううちに、相手も打ち解けてどんどんあふれるように語ってくれました。これはよかった、と思っていたのですが、お話されることは「これは秘密だから書かないで」「私の恥だから書かないで」ということばかりでした。せっかくきいたのに、書けないのです。私としてはうかがったことは貴重な、興味深いお話ばかりでしたので、ぜひ文にしたいのに、書かないで、伏せておいて、と言われるのです。たくさんのお話をきいたのに、書けないことだらけで、省いていくと本当に当たり障りのない文章になってしまいます。この点が非常にむずかしかったです。どこまで書けばいいのか、どこがプライバシーに触れるのか・・・書く時に非常に悩みました。でも、一般の人が読んでろう者の人生を「こんなものか」と思われてはかえって取材に応じていただいたろう者に対して失礼です。ろう者からあれだけ話していただいたのに、それをみんな省略したり割愛したりはしたくありません。私としては、そのろう者の人生を、その人がいかに真剣に、真摯に生きてきたかを書きたかったのです。書きたいけど書けない、そのジレンマに何度も苦しみました。

昔のろう者がどんなに苦労されたか、語ってくれたことは初めて知ることばかりでした。私の両親もろう者ですし、子供の頃からろう者の方たちにかわいがっていただいて、皆さんの暮らしやご苦労はわかっていたつもりでしたが、やはり一人一人違うのです。話をうかがってみると、知らなかったことばかりでした。通訳者としても、大変勉強させていただきました。普段お会いするとろう者はにこやかに、何事もなく暮らしているようにみえますが、実はつらかったことや悲しかったことをたくさん経験しておられます。そういう話を人にする機会もありませんでした。お話をうかがううちに、そういえばあれも、これもと、どんどんいろいろな経験が語られて、そのたびに驚きました。こんなに苦労されたのに、皆さんたくましく生きて来られている、それだけでも通訳者として学ぶことが多かったです。自然と通訳するときの考え方も変わってきました。以前は両親がろう者だし、と深く考えずに通訳していましたが、聞こえないということはどういうことなのかを、本当に知らないといけないと思いました。

今まで被爆ろう者のお話をまとめてきましたが、この世に出せなかったのもあります。以前、中国放送で、私がこういう活動をしているのをきいて、取材させてほしいという依頼がありました。その時被爆経験を語っていただくろう女性の許可を得て、テレビ局に取材に来てもらい、翌日が放映という日に、そのろう者の妹さんから「困る」という電話が入りました。「放映されては困ります。私の家族にろう者がいるということは誰にも言ってないんです」と言うのです。そのろう者はご主人もろうで、お子さん二人は聞こえたため、おばさんに当たる妹さんが、ずっと面倒を見てきたそうです。ろう者のご夫婦は仕事もして、お金にも困ってなかったのですが、とにかく世間には知られないように、ろう協にも行かないように、職場以外には外に出ないように

と妹さんに言われていたそうです。私はそのような家庭の細かい事情は知らず、たまたまそのろう者が病院で診察を受けるときに通訳として会いました。被爆者手帳をお持ちだったので、病院に通訳として同行するたびに被爆体験をうかがうことになったのです。妹さんは、「以前、医師に『お姉さんは血圧が高すぎる、入院したほうがいい』と言われたけど、姉は耳を貸さなかった」と言うのです。実は違うのです、妹さんが聞いて、お姉さんには病気のことをちゃんと話してなかったのです。家族以外との話は全部妹さんが処理していたので、お姉さんは病気といっても自分の体のどこが悪いのか、重いのか軽いのかもわからなかったのです。病気のことを知り、すぐ入院させなくては、と私が手配して、ろう女性はすぐ入院しましたが、私は妹さんには知らせなかったので、その後かなりお叱りを受けることになりました。そんなこともあって「絶対に放映されては困る」と妹さんから電話で言われました。「テレビにも本にも載せないでくれ、うちのことは世間に出したくない」と言うのです。「今まで、何のためにろうの姉夫婦と、子供たちの世話を一身に引き受けてきたのか。これで世間に知れては、私はもう外を歩けない」と妹さんにさんざん言われました。妹さんの立場を考えると、冷たい人というわけではなく、ろう者の姉のことを一生懸命考え、ずっとかばってきたわけです。でもそれがそのろう者の自立にとっては本当にいいことだったのか、私は違うと思います。そのろう者が小さいときから、結婚してからも、仕事のこと、子育てのこと、学校のこと、何もかも妹さんがやってきたので、ろう者の姉夫婦は何もわからないままでした。世間とのことは、全部妹さんが取り仕切っていたのです。妹さんは心の優しい方だったんでしょうが、聞こえないということ、ろう者のこと、身体障害者のことを全く理解してなかったということが、私にはとても残念でした。

被爆ろう者は約140人いらっしゃいますが、8月6日当日に被爆した人と、入市被爆した人がいます。原爆が炸裂した後、市内には放射能が残留していました。その放射能を浴びることを、入市被爆といいます。直接被爆と、入市被爆という言い方があるのです。8月6日以降でも、市内に入った人たちは残留放射能の影響を受けている恐れがありますので、この人たちを入市被爆者といい、直接被爆と入市被爆、合わせて被爆ろう者は140人ぐらいいらっしゃいます。今までにお亡くなりになったのは76人、いま被爆者手帳をお持ちの人と合わせて約140人になります。

「原爆」という言葉はかなり後になって知られることになりましたが、最初は「大きな爆弾が落ちた」と思われました。あるろう者のご老人が、「あれだけ、市内が壊滅するほどの爆弾が落ちたんだから、大きな穴が開いているに違いない」とさがしたが無かった、と言っていました。普通、爆弾が落ちたら地面が陥没するものですから、さぞ大きな穴ができただろうと思われたのでしょうが、地面は平らなままでした。なぜ無いのだろう、とろう者は不思議に思った、と言われましたが、それぐらいみんな、原子爆弾は空中で炸裂するもの、ということも知らなかったのです。原爆のことがわかってきたのは投下された後、かなり経ってからのことでした。

8月6日以降、今まで元気で働いてたのに、急に体の調子が悪くなってきた、疲れやすいし、下痢も止まらない、そのうち歯茎から出血する、髪の毛が抜ける、斑点ができる、など不調を訴える人たちがだんだん増えてきました。戦争中は、若い人たちはみんな召集され、軍需工場は人手不足だったので、ろう者でもたくさん雇われたのですが、敗戦後は一変してろう者の仕事は無くなりました。仕事が無ければ食べていけませんし、その上に体調がどんどん悪くなっていきました。ろう者には身体障害者の苦しみの上に、被爆者の苦しみが加わったのです。自分の体がどうなっているのか、どんな病気なのかもわかりませんし、何年も具合が悪くて病院に行きたくても、仕事が無いわけですから診察代も出せません。被爆者手帳が交付されたのは、12年も後のことです。それまでは治療費は自分で出すしかなかったので、仕事のないろう者には不可能なことでした。障害者である上に被爆して、仕事もない、お金もない、治療も受けられない、人の何倍も苦しみを負ったろう者たちは、それでもたくましく明るく生き抜いておられました。私がお会

いした方たちも、いったいどこからこのパワーがわいてくるのだろうと、不思議に思うほどでした。原爆症の症状やさまざまな困難にも負けず、明るくたくましく、働いて暮らしてきたろう者ばかりでした。

「一番困ったのは何？」ときくと「情報がなかったこと」をあげられました。戦争が終わった、敗戦だったというのはわかったそうです。戦中と戦後とでは、世の中がまるっきり変わり、今まであった軍隊は無くなったのですから。終戦までは、どこの町でも「隣組」という制度がありました。いくつもの組に分かれて、聞こえる人が組長をつとめていました。もともとはスパイ防止が目的で組織されたのです。軍が、スパイが入り込まないよう、お互い監視することができるよう、隣組を作ったのですが、ろう者もそれぞれ、自分の住んでいるところの隣組に入っていました。組長さんは、他の人と同じようにろう者にも、冠婚葬祭や、病気になったときの世話など、まめにしていました。たとえば夜、空襲警報が聞こえたら、どこの家でもカギなどかけていないので、ろう者の家の中まで起こしにきてくれたといいます。ろう者が食べるものに困っていたときも、お互いに食べ物を分け合ったそうです。戦時中、防空壕を掘る作業や、夜、火の用心のための夜回りも、ろう者は一緒にやっていたのです。ですから、昭和時代、終戦までは、広島だけでなくどこの町でも、ろう者は隣組のおかげで随分助かったという話をききます。いろいろな情報も入りました。戦時中はお金で物は買えず、すべて配給切符と交換でした。切符をちぎるような動作で「配給」を表します。その配給がある日には、隣組の人がろう者をちゃんとそこまで連れて行ってくれたそうです。その当時は食べ物にも事欠くこと、いろいろ不自由なことがあることは聞こえる人も聞こえない人も同じでした。ですから、お互いに助け合う、隣組のおかげで情報には困らなかったといいます。

ところが原爆投下後は、この隣組が消滅してしまいました。隣組の人たちは、原爆で亡くなったり、田舎に帰ったりして、終戦後はスパイ防止も要らなくなり、隣組そのものが無くなったため、ろう者は各地で孤立することになります。それまで助けてくれた隣組の人たちが、被爆して亡くなったり、田舎にひっこんだりで、いなくなってしまったのですから、ろう者は一人でどうしたらよいのかわからないのです。誰も情報はくれません。戦時中は軍国主義で、お国のために国民が一丸となっていましたが、戦後は自由主義、民主主義に変わっていました。そんなこともろう者にはわかりません、どうして世の中がこんなに変わってしまったのか。誰も教えてくれないので、その当時は情報がないことが一番つらかった、とろう者は話していました。当然、手話通訳者もいなかったので、世の中がどうなったのかを知るすべもなかったのです。

ある日、近所に立派な木造の家が建てられた。自分はそのあたりの木を集めて作った粗末な小屋で暮らしているのに、どうしてまわりにはあんな立派な家が建つのだろう。そのうち新しい家々には電柱から電線が引かれ、下水も通った。自分は相変わらず古い掘っ立て小屋で暮らしている。どうしてあの家には電気がちゃんと来ているのにうちには来ないのだろう。あの家には水道も下水も通ったのに、うちはいつまでもポンプや汲み取り式で、どうしてうちもあんなふうにならないのだろう。ろう者はどうすればいいのか、手続きの仕方もわかりませんでした。ですから、病気のことも当然わかりませんでした。以前は元気だったのに、急に体調が悪くなり、疲れやすくなった。近所の人もそれは同じで、鼻血が出たり、髪がぬけるようになった。だから、皆が原爆の影響で病気になったのだな、ということはわかるのですが、原爆症のことや病名まではわからなかった。このように、戦後のろう者の暮らしは、いろいろな面で、私たちが思う以上に大変だったのです。さらに、情報がないなどの条件も重なって、聞こえる人たちの暮らしがだんだん立て直されていくのに、ろう者の暮らしはなかなかよくならなかった、と皆さん語ってくれました。そんな中でも、昔のろう者は、小学生だった私から見ても、たくましく生きておられました。宇品の私の家まで、はるか遠くの横川から歩いてこられて、食料を分けてくれて、また帰

って行かれた。いったい何時間ぐらい歩いたんでしょう。五日市の友達に分けてもらって、それからうちに来たそうです。どのぐらい距離があるのか私にはわかりませんでしたが、しゃんとしておられました。みんなたくましいなぁ、元気だなぁと、幼かった私ですが記憶に残っています。

先ほどAコースで資料館を見学なさった人たちはおわかりでしょうが、戦時中は学童疎開がありました。普通の学校に通う小学校三年生以上の子供たちは、軍が手配して、田舎の決められた所に疎開したのです。ところが、聾学校には、いつまでたっても軍からは音沙汰なしでした。聾学校の校長は、「聞こえる子も聞こえない子も同様に、疎開させるべきだ」と、自分で吉田町まで出向いて交渉し、三つのお寺を借りて、広島聾学校は全員疎開しました。高田郡吉田町というところです。町には「郡誌」という、古い記録が残されています。郡誌を見せてもらうと、戦時中、ここの小学校から何名、ここの学校からは何名と、学童疎開を受け入れた記録がありました。ところが、聾学校に関する記録は全くありません。聾学校の生徒たちは98名、三軒の寺を借りて、疎開した事実はあるのです。それなのに記録が無いので驚きました。広島聾学校が吉田町に疎開したのは、誰もが知っている事実です。にもかかわらず、その場所にはろう者がいたという記録は残っていない、もしくは消されてしまっている。戦前も戦後も、身体障害者というものは、社会ではその存在さえ認められていなかったんだな、と郡誌を見ただけでもわかりました。今は、書き換えられているかもわかりませんが、とにかく私が調べたときは、聾学校に関しては一行も書かれていませんでした。当時の学童疎開の子供たちは、日本中みなそうでしたが、食料も乏しく、お風呂にも入れないので頭は虱だらけで、下痢をしたり病気をする子もたくさんいました。広島聾学校の子供たちもそうでした。日本中の疎開した生徒たちは皆、大変な苦労をしたのです。ですから特に、聞こえない子だけがいじめられる、ということはなかったのですが、地方の村が、聞こえない子供たちに住むところを喜んで提供してくれたという雰囲気ではなかったんだな、ということは、郡誌を調べただけでもわかりました。私は以前、吉田町に行ったときに、聾学校が疎開していたお寺を訪ねました。三つのうち、二つのお寺は残っています。聾学校のことをききたかったのですが、ちょうどお寺の住職はおつとめの最中で、お話することができず、帰ってきました。

さきほど、ビデオで浜田さんの被爆証言をご覧になったと思います。浜田よしこさんという方で、こめかみに親指を当ててその方のことを表します。あのビデオには、手話のワイプがあって、私が映っていたのをご覧になったでしょう。あれは最初は無かったのですが、後でつけたのです。広島市が、被爆者の証言を募集してビデオにする、ということを新聞で知りました。被爆者の中には当然ろう者もいるのですから、ろう者の被爆証言も撮ってください、と私が申し込みに行きました。「へえー、聞こえない人もいたんですね」が担当者の返事でした。被爆した人たちの中には、身体、視覚、聴覚などの障害がある人たちも当然いるのに、「へえー」という返事なのです。「ろう者は手話で語られるから、それを撮ってください」と言うと、「手話で語られても、皆わかりませんよ」と言うので、「私が読み取り通訳しますから」と言ったら、「読み取り通訳って、本人の声じゃないならダメです。本人がしゃべらないと証言にはなりませんから」という答えでした。何回お願いしても、「本人の声じゃないと」という理由ではねのけられました。そのとき、たまたま全通研集会が広島で開かれ、ろう者劇団が公演しました。当時めずらしかったものですから、たくさんのマスコミの取材を受け、新聞やテレビでも紹介されました。市としてもそれを見て、さすがに手話での証言を拒否できないと思ったのか、浜田さんの被爆証言を撮りましょう、一人だけですが、と言って来ました。さきほどご覧になったでしょうが、浜田さんの手話はとてもダイナミックで、私の読み取りの声が追いついてないところがあります。インタビュアーの質問と、浜田さんの答えは、なかなかかみ合いませんでした。質問されたことについて、的確に答えられなかったんですね。だいぶ後になって、思い出して答えたものもありました。取材の時、

音響、照明、ビデオカメラなど、スタッフは10人来ていました。６月か７月の暑い時期でした。普通、被爆証言の取材は４０分で終わるそうでしたが、浜田さんの時は７、８時間かかりました。その間、ビデオカメラはまわしっぱなしでした。

やっと取材が終わったと思ったら、今度はこれを20分に編集しなくてはいけません。７時間収録したものを、20分に縮めないといけないのです。皆さんもご承知だと思いますが、手話の語りと、読み取り通訳は完全に同時ではなく、読み取りの声のほうが若干遅れます。ですから、ビデオテープをばさばさ切って縮めていくと、手話は出てるのに音声がない、音声があるのに手話が出てない画面ができてしまいました。手話と声とが一致してないのです。暑い中、編集のために何度も通い、「大変だから、もう読み取りの声は消してしまいましょうか」と言われたのですが、「いえいえ、絶対声はつけないといけません」と、ビデオを何度も見ながら、手話と声と同時に出るように、と思ったのですが、なかなかうまくいきませんでした。その上、ビデオカメラの担当者は、ろう者の手話を撮影するのに慣れていなかったので、浜田さんの顔から胸の上までしか映ってない画面がありました。手話が画面に出ていないのです。でもその間も、私の読み取りの音声は流れています。本当は胸の下のほうで手話をしていたのですが、そこまで画面に入ってないので、手話が見えないのです。私の読み取りの声しか聞こえないではしょうがないと、結局ワイプを入れて、私がそこの手話を補うことになりました。私が自分の読み取りの声に合わせて、手話を入れるということになったのです。そんなふうに、編集作業にも大変な思いをしながら通い詰めました。被爆証言担当のスタッフたちも、普通なら取材に１時間40分、それを20分に編集するのにさほど苦労はしないのに、こんなに大変なんて、と最後のほうはうんざりしていましたが、とにかく満足できるものを作りたい、と何度も何度も通って、一ヶ月間、20分のビデオを作るためにかなりの時間がかかりました。ですから、完璧とまではいかないけど、まだ不本意なところはあるけど、それでもここまでやったんだから完成にしましょう、と言った時は、スタッフ全員が「やったー」とバンザイして、よかったよかった、と喜んでくれました。その時、スタッフの方々が、「聞こえない人たちは障害者でも普通に生活していると思ってたら、聞こえる人たちの何倍もがんばっておられるんですね」と言ってくれました。「ろうの方たちは聞こえる人たちとおつきあいしながら生活して、障害者といえど立派に自立して、困難にも負けず、大変な努力をされているんですね」と言われました。私自身は、ろう者が苦労してきた、辛抱に辛抱を重ねてきた、ということは重々承知していましたが、この被爆証言のお仕事で、一緒に働いてきたスタッフの人たちに、「ろう者の方たちのご苦労が初めてわかりました」と言われたのです。私自身も今まで当然知っていたつもりでしたが、確かにろう者の皆さんが大変なご苦労を積み重ねてきた歴史があるのだ、ということをあらためて感じました。

被爆ろう者の証言の二人目は、さきほどお話した掛谷さんでした。浜田さんが一人目、二人目として掛谷さんの証言ビデオを撮ることになりました。浜田さんの時の苦労が頭にあったので、二度と同じ轍は踏むまいと、今度は考えました。インタビュアーに質問させるのではなく、掛谷さんにまず話してもらいました。掛谷さんのお話について、インタビュアーがそのつど質問していく方式に変えました。そのため、読み取り通訳の音声もうまく入れることができました。浜田さんの時は、質問に答えてもらうのも大変、撮影も大変、編集も大変、と大変なこと続きで、やはりろう者の被爆証言を撮るのは、聞こえる人のようにはいかないなとつくづく思いました。ですから、次の掛谷さんの時は、始める前から私もいろいろ考えて、先に話をしてもらって、それについてのインタビューをして答えてもらう、というやり方に変えたので、今度はとてもスムーズに行きました。

被爆ろう者の証言ビデオはこのお二人だけです。三人目の証言をぜひ残したいと思っています。被爆証言（ヒロシマの証言）ビデオは今でも作成されていて、一年に50人ぐらいの証言を募集し

ています。ろう者の証言が二人だけではさびしいですね。本当はもっともっと、たくさんの証言ビデオがほしいです。お手伝いするこちらとしては、何度もすると大変ですが。

さきほど、「原爆死没ろう者を偲ぶ碑」が建立されたことは大西先生のご挨拶の中で触れられていましたね。これは元々、さきほどお話した掛谷さん、私の父の三上、それから広島では有名な大崎さんという三人のろう者が、昭和23年から、「ぜひ原爆で亡くなったろう者のための碑を建てよう」と運動を始めたのです。昭和23年といえば、誰もが暮らしていくのにやっとの時代で、食べ物もない、仕事もない、原爆症はつらいで、運動は広がらず、頓挫しました。掛谷さんはその時の無念な思いをずっと持っておられて、その後、ろう協の会長の吉上さんに、「どんなに小さくてもいいから、碑を建ててほしい」と懇願されたのです。吉上さんも託された思いをどうにかしたいと考えられていました。たまたま、市の広報に、広島市には被爆対策課という部門があって、被爆に関するいろいろなことを取り扱っているのですが、そこで「慰霊碑を建てるのなら、市から費用を半分助成します」という記事が載っていました。吉上さんは、それを見て、これはよかった、市が助成してくれるのなら、と運動を始めたのです。ところが、大西さんも言われていたように、碑を建てるところをどこにするかで、計画は行き詰りました。最初は平和記念公園の中に建てさせてもらいたい、とお願いしたのですが、それはできませんと言われました。

その時すでに平和記念公園では、もうこれ以上は碑を建てられません、と全部申請を却下していたので、ろう者のためにだけ許可するわけにはいきませんといわれたのです。ではどこに建てたらいいのか、心当たりの場所はありません。普通は碑を建てる場所を探し、そこの許可をもらってから、それを市に提出すると、費用の助成が受けられるのです。場所が決まらなければ、資金集めもできません。相談に行ったら、市の対策課の人が、「聾学校にあるのではないですか、あそこのグラウンドがあるでしょう」と言われ、おおそうだ、と聾学校にお願いしにいきました。そのとき、「原爆死没ろう者を偲ぶ会」としてお願いしたのですが、聾学校は話をきくと、「偲ぶ会は民間団体だから寄贈は受けられない」と言ってきました。どうしたらいいですかときいたら、「聾学校の同窓会からの寄贈なら受けられます」ということでした。ところが今度は、「広島聾学校は県立だから、あそこの土地は県のもの。県の土地に建てるのに、市から費用を出すわけにはいかない」と市のほうの助成金が下りないという事態になりました。

その頃、ちょうど私は吉上さんの被爆体験をうかがっていました。先ほどお話した被爆ろう者の取材をまとめた本「生きて愛して」を上梓した後、10年以上ろう者の被爆体験をきく活動は中止していました。その時期は医療関係の活動に集中したかったのです。他の活動はお休みしていたのですが、しばらくぶりに被爆ろう者の聞き書きを再開しようと思った時に吉上さんにお会いしたのです。被爆体験の話をしていただいている時、吉上さんから「原爆で亡くなったろう者を偲ぶ碑をなんとしても建てたい」ことを何度もききました。「今度、聾学校にお願いしに行くんだけど、通訳してくれないか」とたのまれて行きますと返事しました。ところが行ってみると、学校側の言い分と、吉上さんの言い分は食い違うことばかりでした。碑を建てるどころの話ではなく、どうしたらいいんだろう、どっちの言うことが正しいんだろう、事情がわからないと通訳はできないし困りました。また、通訳者の仕事は通訳するだけですから、自分の意見を言うわけにはいきません。そこで、私が「偲ぶ会」に入ってしまえばいいんだ、と思いつきました。そうすれば私も好きなことが言える。頼まれたわけではないのですが、事務局を引き受けてしまいました。

引き受けたのには理由があり、昭和23年に私の父、三上がそういう運動を始めたのだが頓挫した、ということをきいたからです。それまでは知りませんでした。父が手作りで、亡くなったろう者の方たちのための位牌を作ったことは知っていました。でもそれが、建てたかったけどかなわなかった碑の代わりとは知りませんでした。吉上さんから初めてそのことをきかされ、亡くな

った父は、自分たちの運動の成果を見ることもなく、さぞ無念だったろうと思いました。父の思いを受け継ごうと、私が事務局をやります、と申し出たわけです。偲ぶ会に入って事務局を担当することになったのだから、今までの通訳者の立場と違って、何でも言えます。聾学校の校長、県教育委員会の人たちにもどんどん私の意見を言って、話し合いを重ねているうちに、今までどうして食い違っていたのかがわかりました。誤解が誤解を呼んで、話が通じてなかったのです。それまでの偲ぶ会は通訳者を同行してなかったので、話は全部筆談でした。被爆対策課との話も筆談、聾学校の先生も手話がうまいわけではありませんから、筆談していました。それで誤解が重なって、話にならなかったのです。話を整理したら、かみ合うようになりました。その後、市に費用を半分助成してもらうのはもうやめて、自分たちで資金を集めよう、と会で話し合って決めました。全部カンパで、自分たちの力で碑を建てよう。全国の皆さんにお願いして、寄付を集めよう、という運動を2年近くつづけて、やっと念願の偲ぶ碑を聾学校に建てることができました。

初めは予算を100万円にしていたのですが、いろいろな方にお願いしてご寄付をいただいているうちに、目標額をはるかに超えて、200万近く集まりました。小さな碑を予定していたのですが、あまりにもたくさんのご寄付が集まったので、大きな立派な碑が建ちました。材質も、最初は普通の石でいいと思ったのですが、高級な黒御影石で碑を作ることができました。設計図も専門の方にお願いし、立派な図面を描いてもらいました。本当に皆さんのおかげで、念願の碑を建てることができました。どうぞ、もしお時間がありましたら、ろう学校に見にいらしてください。碑を作るとき、被爆死したろう者のお名前を石の背面側に刻もうと思ったのですが、「学校に行った事のないろう者も入っている。ろう学校出身でもない人の名前を刻まれても」と学校側に言われました。学校のほうは初めはいいですよ、と言ったのに、いざとなると名前を刻むことには反対されました。聾学校出身者と聾学校に関係のない人を一緒に並べて名を刻むのはだめと言われたのですが、このことは偲ぶ会でもかなりもめました。最終的に、もうしかたがない、名前を刻むのは諦めようということになりました。石の表側に「原爆死没ろう者を偲ぶ碑」背面側には「広島聾学校同窓会」と刻まれています。同窓会が作ったような印象を受けますが、実は偲ぶ会の人たちが、原爆で亡くなった人や、まだお元気で被爆者手帳をお持ちの人を、一軒一軒訪ね歩いて、調査を重ねた地道な活動のおかげでこの碑はできたのです。素晴らしい碑になっていますので、皆さんどうぞ行ってご覧になってください。

皆さん、私がろう者の取材をして本を書いたので、さぞすごい人だと思ってるでしょうが、実際はそんなにむずかしいものではありません。ただ、手話がうまい人、長年ろうあ運動に取り組んでいる人ならできるかと言えば、そうとも言い切れません。その土地に住み、その土地のろう者とおつきあいがあることが大切です。私がろう者の手話を読み取れるから、沖縄に行って地上戦を経験したろう者の話を聞き書きできるかといったら、それはできません。私は沖縄に住んだことはないし、沖縄の気候風土を全く知りません。そんな私に、沖縄のろう者のことを書けるわけがありません。その土地に住み、そこのろう者と長くおきあいして、初めてろう者のお話をうかがって文にできるのです。ろう者のお話を取材するには、手話がうまいというよりも、その土地に長く住み、気候風土、食べ物、暮らしなどがよくわかっていて、ろう者とおつきあいしている、一緒に活動している、そういうことが一番大切なのです。ですから、皆さんもご自分の地域で、ろう者のいろいろな経験をきいて、その記録を保存しておかれるといいと思います。以前、札幌であるろう者の個人史をまとめたとききました。素晴らしいことだと思います。その土地に自分も住んでいる、一緒に活動している、これが大事なのです。手話がうまいから、ろうあ者問題をよく知ってるからと言って、よその土地に行ってすぐ聞き書きができるわけではありません。

実は、私は最初にろう者のお話をうかがって文章にした時、標準語で書いたのです。

でも広島には広島弁があるんですよね。ろう者も広島の手話でお話していますよね。どこの地方でも聞こえる人に方言があるように、ろう者の手話にもその地方独特の手話があります。最初に標準語で書いたんですけど、なんだかおかしいな、しっくりこない、どうしてなんだろうと思いました。それで、広島弁で書いてみたらどうかしらと思い、今まで見たろう者の手話を思い浮かべたら、なるほど広島弁のほうが合うのです。やっぱり広島のろう者の手話は、広島弁で書いた方が合うんだ、とあらためて思いました。広島弁で書いたのを読んだ他所の人から、「もしもろう者がおしゃべりできたら、広島弁でしゃべると思われたからですか」と言われたのですが、そうではないのです。ろう者が話せるようになるわけはありません。でも、広島のろう者の手話には広島弁の雰囲気が合うということです。ですから、広島の手話を記録として保存する場合、広島弁で書くことが大切だと思います。京都だったら京都の手話を、京都弁で記録した方が、雰囲気が合うと思います。東北の手話なら東北弁がいいですね、他の地方の手話の保存記録はまだ拝見したことがないので想像ですが。どこでも、その土地の手話にはその土地のことばが一番合うのだろうと思います。同じ土地の気候風土や暮らし方が、ことばにも手話にもしみついているんでしょうね。ですから、私が他の土地にいきなり行って、そこのろう者の手話を聞き書きしようとしてもうまくできるわけがないのです。皆さんもそれぞれの地元で通訳活動をしながら、その土地の歴史、ろう者の暮らしを記録する活動をしていただきたいと思います。そうやってろう者、障害者の歴史を書いた記録を残すことも、私たちのとても大切な役割だと思います。

これで、お話したいことは、だいたい話しましたので講演は終わります。もし何かご質問がありましたら、おききになってください。

（司会）まだ、これで終わりではありません。9時半までの予定ですので、ご質問のある方は、遠慮なく手をお挙げください。一人ずつの質問に答えていただきます。

一人目

茨城県から来ました、深沢と申します。仲川さんのことは、NHKで拝見して、本も読んでぜひお会いしたいと思ってまいりました。今日はすばらしいお話、ありがとうございました。茨城県聴覚障害者協会では、毎年9月15日の敬老の集いに、高齢ろう者の方に体験をお話していただいてます。その時、昔の手話を通訳が読み取れず、苦労していました。仲川さんはご自身も高齢者の手話を読み取れるからいいですが。そこで、どうしようと考え、高齢者の手話をもっと若いろう者が読み取って手話にして、その手話を通訳者が読み取って音声にする、という方法にしました。仲川さんが本を書かれたように、茨城でも高齢ろう者の体験を本にしたらいいと思います。直接の空襲はなかったものの、生活は苦しく、食べ物もなく、爆弾が破裂するのを見てこわかった、という話を見ると、私までこわくなりました。ぜひ茨城県も、そのような戦争体験者のろう者のお話をまとめた本を作るべきだと思いますね。それを読めば、昔のろう者のご苦労がよくわかるでしょう。広島にはあるのに、茨城にはないのはとても残念です。ぜひ作りたいと思いますが、どのようにすればいいのでしょうか。

（仲川）今いわれましたように、私の場合は親も昔の人間ですので、ご高齢のろう者の手話はよくわかります。かえって、若いろう者の方がお年寄りのろう者の手話はわからない、と言いますね。その場合、高齢ろう者の手話をやや年下のろう者が読み取って、通訳者に伝える、つまり三段階で伝える方法があると思います。記録をするときも、そのようにろう者にろう者の手話を読み取ってもらったのを書いてもいいですね。もちろん、直接ろう者ご本人の話がわかれば一番いいのですが、そんなふうに間接的になっても、別にかまわないと思います。

（質問者）そうですね、わかりました。ありがとうございました。

二人目

兵庫から来ました。すみません、漢字の読み方がわからないので教えて下さい。
「原爆死没ろう者を偲ぶ碑」の「碑」ですが。
(仲川)「碑」は「ひ」と読みます、1字です。
ありがとうございました。もう一つ申し上げたいのですが、いろいろな活動をなさっているその背景をうかがい、本当にすごい話ばかりで圧倒されました。たくましく生き抜いた人たちのことを考えると、とても私には真似できないと思います。もしも今ここで、地震や台風などの天災が起きたら、皆おたおたするばかりで何もできないでしょう。経験がない者は、どう対処したらいいかわからないですね。心の準備が大切なんだなと思いました。今日のお話はぜひ参考にさせていただきます。
伊藤政雄
仲川さんに質問、というよりも、皆さんにご参考のためちょっと話をさせていただきます。広島と長崎に原爆が落とされ、東京、大阪、横浜がB29の空襲を受けて、町が焼け野原になったのは、皆さんもご存知のことですね。実はもうひとつの攻撃があります。
(板書「艦砲射撃」) 艦は軍艦のこと、砲は軍艦から発射される大砲のことです。戦時中、日本はアメリカの軍艦から艦砲射撃を、つまり海から陸地に砲撃を受けたのですが、その場所はどこなのか、皆さんお答えください。沖縄、そうです。あとは…北海道の室蘭。本土にもあります。鹿児島、あとは？　東京の近くにもあります。そうです、日立、茨城県の日立と水戸も艦砲射撃を受けたのです。
これは空襲よりもさらに怖い攻撃です。大砲の砲弾一発で、そのあたり一帯が吹き飛ばされて、何もなくなってしまいます。第二次大戦で受けた攻撃と言えば、空襲と原爆、それぐらいしかご存知ない方が多いと思います。この艦砲射撃をご存知の方はごく少数ですね。でも一つの資料として、しっかりと頭に入れておいてください。
三人目
栃木から参りました。先ほど仲川さんがお話されたようなことを、栃木でもお年寄りの方たちから、戦争体験をききました。空襲のことなどきいて、本当に怖くなりました。高校三年のとき、旅行で広島に来ました。資料館で原子爆弾のこと、被爆者が苦しんでいる写真や絵などを見て、その後、被爆者の体験をききました。ろう者ではなかったのですが、被爆者から実際にお話をうかがいました。宇都宮にも昭和20年8月12日に空襲があったそうです。私の両親は昭和16年生まれですから20年当時はまだ4歳だったそうですが、その当時の話を聞くととても怖くなります。今日はありがとうございました。
(仲川) 最近では、両親から戦争体験をきいた、という人も少なくなっていますね。「平和ボケ」という言葉もありますが、戦争は怖いものだと、実際に体験した人から話を聞けるような機会は減ってきています。お父さん、というよりおじいさんの世代は、戦前、戦中、戦後の日本がどうだったかをよくご存知です。特にここ広島は原爆が投下された所です。投下された時にたくさんの人が亡くなりましたが、その後の放射能の影響も大きかったのです。少なくなると言えば、平和記念公園で、被爆者が修学旅行生たちに体験を語る、「語り部」をつとめる方たちが亡くなって、どんどん数が減ってきています。いま、「語り部」の方たちから話をきいた若い世代の人たちが、つぎの若者たちに語りつぐ活動が始まっています。そうした、被爆体験を次の世代に語り継ぐことはとても大切なことだと思います。皆さんも、ご両親やおじいさんに、戦争体験を語ってもらい、それを筆記でもビデオでもいいので、残しておくことをおすすめします。平和でなければ、ろう者は普通の社会生活はできません。戦争になったら、障害者の人たちはまともな暮らしが営めなくなります。「平和が大切だ」ということを心の底から理解し、しっかりと心に留めておいていただきたいと思います。

四人目

広島県呉市の沖田と申します。いま戦争の怖いお話をききましたが、私は友達とお正月休みにベトナムに旅行したことがあります。そのとき、ベトナムとアメリカが戦争をした時の塹壕の残っているところとか、銃殺されている写真を見ました。お年寄りでも妊婦でも障害者でも、皆殺しにされたという説明を読みました。本当に怖くて、友達は「もう耐えられない」と飛び出してしまいましたが、私は我慢して写真を見ていました。

そこにいたベトナム人のガイドは、手話が少しできる人で、最初はベトナムが優勢だったが、のちにアメリカに敗れたという話をしてくれました。本当に恐怖をおぼえました。

広島も同様だったのだろうと思います。ありがとうございました。

五人目

大変素晴らしいお話をうかがって感動いたしました。いま広島では、被爆者の方たちがいろいろな体験を話されていて、とても記憶に残る言葉も多いだろうと思います。

それと同様に、被爆ろう者の体験を聞き書きされたとき、特にお願いされた、とか、ぜひこのことを伝えてほしい、と言われたとか、特に印象に残ったお話はありますか。被爆ろう者の方たちのお話は、みな貴重な忘れがたいお話だったと思いますが、特にこのことは印象に残っている、忘れられない、これからも語り継ぎたい、ということはありますか。

(仲川) いろいろ覚えていたつもりだけど、突然言われると… お話をうかがったろう者がおっしゃったことで共通しているのは「平和が一番大切」 これは皆さん同じことを言われました。偽者の平和はすぐに見破られてしまう。聞こえる人に比べて、ろう者や障害者は本物か偽者かを見破る力がはるかに優れていると思います。いろいろな人のお話をうかがっていくうちに感じたのですが、口で語られたことは、本音なのかどうかなかなかわかりません。ろう者が、ご自分の手で、体で語ってくれたことは感動の厚みがちがいました。取材したろう者の手話はそんなに感情を露わにしたものではなく、むしろ「淡々」という言葉が合うような静かなお話のしかたでした。ですが、聞こえる人が感情あふれる声で話されるより、淡々とした手話で昔の思い出を話されたろう者の方のほうがより印象に残っています。感情をむき出しにした手話でなくても、その人の本当の気持ちが、昔どんなに苦しい思いをされたか、どう乗り越えてきたかがよく伝わってきました。落ち着いた話し方の中に重みがあったと思います。

六人目

昔、杉原千畝という人が、6000人のユダヤ人の命を救った話はご存知ですね。それに関連して、その時代に「マンハッタン計画」がありました。科学者のアインシュタイン、オッペンハイマー、原爆の研究開発をした科学者は皆ユダヤ人でした。そのユダヤ人がどうして、日本に落とす原爆の開発に協力したのでしょう。ドイツはユダヤ人狩りをしていましたから、ドイツに原爆を落としたいならまだわかります。どうお考えですか？

(仲川) そうですね、アインシュタインなどのユダヤ人科学者は、ドイツ・ナチスの政策に反発してアメリカに亡命し、アメリカがその研究を利用したのですが、どうして日本に落としたのかは、私がアメリカに本音をききたいぐらいです。たぶん、地理的条件に加えて広島が当時軍都で日本軍の心臓部だったため、そこに落とせば致命的な損害を与えられるからでしょう。「戦争を早く終結させるため」というアメリカの言い分は私にはどうも本心に思えないのです。本当は、研究開発した原爆を実験してみたかったというのが本音ではないかと思っています。アメリカとしては、そういう戦略があったのではないかと、これは私の想像ですが。できたらアメリカに直接ききたいです。

七人目

仲川さんのように、ろう者の手話を上手に文章に変えられればいいのですが、私のようなろう者

には、手話を見てわかっても、文章にするのは至難の業です。ろう者の手話から、読んだ人を感動させるような文章に変えるのにはどうしたらいいのでしょう。聞こえる人にそれをやってもらうのは、どうしても私には不満があります。本当にろう者のことをわかっているのか、もしやるなら私たちろう者がやりたい、という希望を持っています。
誰も教えてくれませんし、やはりろう者が一人でやるのは無理なのかなと思います。聞こえる人に手伝ってもらってもいいけど、できるだけろう者の意志を尊重してもらって、お互いに協力しながら作って、皆さんに読んで感動してもらいたい。もちろん大変だということはわかっていますが、もっかのところの私の夢なのです。ありがとうございました。
（仲川）よくわかります。私もろう者にならないかぎり、ろう者の話を全部理解することはできないと思います。私はやっぱり聞こえるので、ろう者の本当の気持ちをわかっていたのかどうか、自分でも自信がありません。わかったつもりではあっても、本当に理解したのかどうか。逆に、ろう者にも私の気持ちをわかっていただけたかどうかもわかりません。確かに、ろう者の手話語りを記録するのは、ろう者同士でやれれば一番いいのです。さきほど言いましたように、同じ土地に生まれ育ち、同じ気候の中で同じように暮らしていて、共通する部分が多ければ多いほどいいのですから、ろう者同士でそうできれば一番よいと思います。でも、こう言っては失礼に当たるかもしれませんが、ろう者同士だとかえって本音は出せません。見栄もあるでしょうし、言ったら後悔するようなことは、最初から言いません。私は聞こえるし、また両親はろう者なので、かえって私には言いやすかったのではないかと思います。ろう者同士では本音は言いにくいでしょう。自分の恥になるようなことは、言わないようにしていると思います。聞こえる人にだったら気楽に話せる。だから、そういう意味では私が聞き書きをするということはいい面もあったのです。でも、本当に心の中を全部打ち明けてくれたのかは、わかりません。私はわかったつもりでいましたが、完全に理解し合えたのか、それは自信がありません。
取材に行くときはいつも一人で、他にろう者が同席することはありませんでした。一対一だから、「これは人に言わないでね」と言われたら、私だけの胸にしまっておけたのです。もし他にも人がいたら、口止めしてもしゃべってしまうかもしれない、とろう者は勘ぐってしまいます。そうなると本心は言いません。ですから、私は取材に行くといっても、ビデオ撮影も録音もしませんでした。向かい合って座るだけです。メモを取りながら見る、ということもしませんでした。ただひたすらろう者の手話を見て、家に帰ってから、さっき見た話を思い出しながら書きました。そういう方法もあるのです。ろう者同士でできれば一番いいのですが、なかなかそれができない場合は、聞こえる人に協力してもらってもいいと思います。できれば地元の聞こえる人がいいでしょう。
ろう者の手話から日本語の文章によく翻訳できますね、と言われましたが、どうやったら翻訳できるのか、私の方がききたいぐらいです。どう文章に変えたらいいかが、一番頭の痛いことなのです。日本語と手話は別のものなので、完全に一致させようと思う方が無理です。言葉の持つニュアンスと、手話のニュアンスは違いますので、まったく一致させることはできません。私の日本語の語彙もそんなに豊富ではありませんし、翻訳能力もないので、なかなか思うようにはいきません。でも今後、私自身も勉強しようと思っています。
八人目
山本と申します。中学時代に戦争について書かれた本を読みましたが、その中に忘れられない一文がありました。「原爆を落とした国よりも、落とされた国のほうが悪い」という文でした。つまりアメリカは悪くない、日本が悪い、という意味です。確かに日本も悪いけど、広島の人たちはどう思われるのでしょうか。
（仲川）あなたは、日本は悪くないと思ってますか？

（山本）いいえ。
（仲川）悪いと思ってるのね。アメリカの言うとおりだと思ってます？
（山本）いいえ、アメリカも悪いと思います。
（仲川）アメリカも悪い。日本も悪い。日本は悪いのだから、原爆を落とされて当然だと思ってます？
（山本）いいえ、それは抵抗があります。
（仲川）抵抗を感じますね。
（仲川）私もこの部分は気になります。原爆を落とされたのは、日本が悪いからで、アメリカは悪くない、というのはアメリカの言い分で、原爆を落とされたこちらは、日本は悪くない、アメリカが悪いからだ、という応酬があります。でも日本も戦前戦中は悪いことをしたのです。満州や中国に侵攻して占領し、あらゆる物を略奪したのです。それが戦争というものです。平時であれば、人はそんなに簡単に人を殺せるものではありません。いったん戦争が始まると、それが平気になってしまうのです。

いま思い出した話ですが、田舎に住んでいるろう者夫婦がいて、ご主人はその村の生まれで、奥さんは隣の町から嫁いで来ました。ご主人は小さい頃から、村の子供たちと遊んで育ち、いじめられることはありませんでした。戦争になった時、そのご夫婦には４、５歳になる男の子がいたのですが、戦争が始まる前までは両親のことでいじめられたことはなかったのです。奥さんは和裁が、ご主人は洋服の仕立てが上手だったので、安く作ってもらえるからと、村の人たちは皆、着物や服を作ってもらっていました。奥さんはその村の生まれではないのですが、皆によく頼まれて、夫婦は裁縫の仕事で暮らすことができました。やがて息子が生まれ、夫婦は喜びました。戦争が始まると、村の若い男性はみんな召集されました。ろうのご主人だけが、召集されません。自然と妬まれるようになりました。若い女性たちは、自分たちの夫が皆、出征して行ったのに、「あそこの夫だけ、ろうであるというおかげで残っている」　そのうち、次々と夫たちの戦死の知らせが来ました。「あの、ろうの夫だけが無事でいる」　その妬みから、ろう夫婦の息子へのいじめが始まりました。ご主人が話してくれましたが、「自分は子供の時にいじめられることがなかったのに、うちの息子は聞こえるのに村のみんなからよくいじめられていた」　どうしてそうなったかというと、戦争のせいなのです。戦争で村のみんながおかしくなってしまった、ろう者はそう話していました。私もそう思います。戦争さえなければ、平穏な生活が続いて、ろう者夫婦も、その息子も、つらい目に合わなくてすんだのです。戦争のせいで、息子はお父さんが兵隊に取られなかったというだけでいじめられた。これも戦争の責任です。ろう者にも身体障害者にも戦争が及ぼした影響は大きかったのです。戦争は人々の性格まで変えてしまいます。日本は中国や韓国も侵略しましたが、これも戦争のせいです。もし平和な時代が続いていたら、国同士の交流も続いていたと思います。人々の考え方も、暮らしも、人柄もすべて変えてしまう、それが戦争だと思います。

（司会）それでは、これで終了いたします。いま一度、大きな拍手を仲川さんにお送りください。
（拍手）